

岐阜関ヶ原古戦場記念館協議会 議事要旨

日 時 令和7年2月27日（木）13時25分～14時50分

場 所 岐阜関ヶ原古戦場記念館 3階セミナールーム

参加委員 伊藤委員、いなもと委員、笠谷委員、葛西委員、北村委員、松川委員、三輪委員
県(事務局) 小和田館長、梅本副館長、山本総務課長、池戸企画課長

【会議の概要】

議題1 岐阜関ヶ原古戦場記念館協議会会長の選任について

- ・互選により、三輪委員が会長に選任された。

議題2 令和6年度運営実績について

議題3 令和7年度事業計画について

- ・事務局から資料に沿って説明した。

議題4 意見交換

(松川委員)

- ・開館から4年半が経過し、私自身も何度か訪問しているが、新しい展示物の増加やイベントやサービスの充実が見られ、大変満足している。
- ・教育旅行の入館者数減少については、開館当初はコロナ禍で修学旅行先が県内施設に限定されていたという特殊事情があり、コロナ収束に伴う制限緩和による自然な減少は致し方ないと思う。
- ・コロナ収束後の観光地や文化施設は大変な混雑状況であるが、記念館は（特に閑散期は）ゆっくりと観覧できる点が魅力。この「混雑していない環境でじっくり楽しめる」という特長を逆に積極的にアピールしてはどうか。
- ・インバウンド観光客が京都・東京・奈良などに集中する中、関ヶ原の豊かな自然環境を活かしたハイキングやサイクリングなどのアクティビティと合わせた広報戦略も効果的ではないか。
- ・前回の協議会で提案された若手研究者育成について、すでに冊子として具体化されており、大変評価できる。
- ・関ヶ原は全国的に知名度が高いものの実際の来訪者は限られている。開館からまだ4年半であり、これからの知名度向上が期待される。5階展望室からの季節ごとの景観や、レストランスタッフのホスピタリティなど、多角的な魅力を広報することで、さらなる集客につながるだろう。

(北村委員)

- ・毎年、様々な企画や取り組みが考案され、来場者を飽きさせない工夫がなされていること

に感銘を受けている。来場者データによると初来場の方が多いようだが、今後はリピーターを増やすための魅力的な企画の充実を期待している。

- ・NHK 大河ドラマ「どうする家康」の放映により令和5年度の来場者数が顕著に増加した実績を踏まえ、現在国際的に話題となっている「SHOGUN 将軍」とのコラボレーション企画を検討してはどうか。
- ・関ヶ原合戦の日である9月15日に行ってきた烽火イベントの運営が「のろしの会」から「関ヶ原もりあげ隊」に引き継がれた。これまではドラム缶とトタン筒を使用してきたが、今後は戦国時代の烽火を可能な限り忠実に再現したいと考えている。この点について小和田館長のご指導をいただければ幸いである。
- ・新知事の就任に伴い、今後の関ヶ原でのイベント展開の方向性について伺いたい。

(笠谷委員)

- ・訪日外国人が増加している中、彼らを関ヶ原へ誘導するための具体的な戦略を検討する必要がある。関ヶ原を訪れた外国人観光客を通じて、日本の武士文化を世界に体系的に発信できる仕組みの構築を検討されたい。
- ・小学生を中心とした若年層の会員組織を立ち上げ、関ヶ原を盛り上げられるような取り組みと、それを支える体制の整備を検討されたい。
- ・「SHOGUN 将軍」の人気もあり、現在、姫路城には多くの外国人観光客が訪れている。外国人にとって、日本の武士や武家文化を体感するには、お城が非常に分かりやすいシンボルとなっている。一方、関ヶ原は歴史的重要性がありながらもシンボリックな建造物がないため、城郭をキーとして地域間の連携を深め、インバウンド観光客を関ヶ原にも誘致する戦略を検討してみてもどうか。

(葛西委員)

- ・インバウンドは高山や白川郷に一極集中している傾向があるが、岐阜や西濃地域などにも観光客に訪れていただく必要がある。観光連盟では「VISIT 岐阜県」というホームページを立ち上げ、インバウンド観光客を県内各地域に分散させる取り組みを進めている。
- ・関ヶ原といえば雪の印象が強いが、これはインバウンド観光客にとって魅力的な要素である。多くの外国人観光客は日本の雪景色を体験したいと考えており、この点で関ヶ原は大きな親和性があると考えられる。
- ・現在、バス業界は運転手不足に直面しており、修学旅行の対応が困難な状況が生じている。バス協会としては、需要を年間通して分散させるよう各学校に依頼しているが、修学旅行は気候の良い時期に実施することが早い段階で決定される。そこで、日帰りの研修旅行に注目してはどうか。関ヶ原は日帰り旅行に最適な場所であり、1月から2月の閑散期に各学校を誘致できれば、需要の年間分散化にもつながり、バス会社にとっても望ましい状況となる。
- ・記念館のホームページには関ヶ原を巡るサイクリングコースが紹介されており、大変充実した内容だと感じた。県から木曽川沿いにサイクリングルートを整備するという構想が示

されているが、これらと連携できれば相乗効果が期待できると考える。

- ・観光振興において食事は重要な要素。以前、岐阜バスの企画で、関ヶ原駅前の料亭で武将の衣装を着用して食事をし、その後古戦場を巡るというツアーがあったと聞いている。このような体験型の創意工夫に富んだ企画をさらに発展させる余地があるのではないかな。

(いなもと委員)

- ・令和6年度の運営実績を過去と比較して、企画の厚みが年々増していることに感動している。イベント、企画展、研究会、若手育成など全ての分野において丁寧な運営がなされており、大変素晴らしいと感じている。また、初年度にワークショップとフィールドワークの実施を要望したところ、令和6年度には2回以上開催されており、大変嬉しく拝見した。
- ・アンケートについて一点要望がある。訪日外国人が増加している中で、関ヶ原への外国人訪問者数を把握したい。アンケート集計において「県外」の区分に加えて「海外」という枠を設け、さらに可能であれば「中国圏」「アメリカ圏」「ヨーロッパ圏」などの地域別データも収集できると有益かと思う。
- ・現在、江戸城でツアーガイドを担当しているが、コロナ前は訪日外国人が約5割だったものが、現在は7～8割まで増加している。特に中国人観光客の増加が顕著。江戸城の皇居一般参観ツアーでは、各回500人定員のうち400人が外国人という状況で、英語、中国語、韓国語、フランス語、イタリア語など多様な言語での案内が必要となっている。初来日の外国人は東京、大阪、京都、愛知などを訪れるが、リピーターは地方である高山や関ヶ原を訪れる可能性が高まる。その時に備えて多言語対応の準備が必要であると考えます。
- ・ライターとしての経験から、インターネットユーザーの検索キーワードを分析した。「岐阜関ヶ原古戦場記念館」の検索時期を調査したところ、8月中旬（16日～20日頃）が最も多く、次いでゴールデンウィーク直前の4月25日頃が多いという傾向が判明した。地域別では、予想に反して東京よりも大阪からのアクセスが多いことが分かった。
- ・キーワードマップ分析によると、「関ヶ原」に続いて検索されるワードとして、「何県」「どこにある」といった基本的な位置情報に関する検索が多いことに驚いた。歴史好きには自明でも、関ヶ原の地理的位置を知らない層が多いという事実が明らかになった。来年度で開館5周年を迎える記念館としては、こうした基礎知識のない層にも向けた情報発信が必要だと感じる。具体案として、ホームページをさらに充実させ、関ヶ原の日常を紹介するようなコンテンツを追加してはどうか。

(伊藤委員)

- ・国の施策として各地でDMO（観光地域づくり法人）が立ち上がっているが、DMOとの連携や情報共有はどのように行われているのかについて伺いたい。県内の小規模DMOだけでなく、（一社）岐阜県観光連盟や（一社）中央日本総合観光機構のような広域DMOとも連携を強化し、特にインバウンドデータについては定期的なアップデートを行い、消費動向や国別の動向などを発信していくべきだと考える。関ヶ原からの情報をもとに、県内全体で経済効果を最大化する取り組みが各地で進められるべきである。また、インバウン

ド観光客がオーバーツーリズムの地域だけでなく、まだ観光が十分に発展していない地域にも訪問し、そこで経済効果を生み出すことが県内全体にとって大きなメリットになる。そのためには、観光客の周遊を促す仕組みやプロモーションを、岐阜県と各地域が協力して構築していく必要があると考える。

- ・歴史好きの高校生であっても、記念館に訪れたことがない生徒が多くいる。高校生は部活動や学習塾で忙しく、友人同士で自発的に訪れることが少ないため、学校行事である遠足や社会見学で記念館への訪問を促していただきたい。例えば、河川環境楽園オアシスパークと組み合わせた日帰りツアーなどは魅力的な選択肢ではないか。岐阜県の高中生が県内の素晴らしい場所に足を運ぶことで、県民としてのプライドや郷土愛につながり、大学進学後も各地で岐阜の魅力を発信できる人材になるという好循環を生み出せる。また、高校生の興味を引くためには、グルメ体験やSNS映えするスポットを取り入れるなど、若者の視点も考慮いただければ幸いである。
- ・若手研究者支援事業は非常に素晴らしい取り組みだと感じている。現在の日本では『ポストク問題』が深刻化していると考えられるので、若手研究者が活躍できる場が不足している実態を肌で感じている。今後も支援を継続していただき、若手研究者を育成・支援する先進的な取り組みを岐阜県から全国に発信していただけることを期待する。

(三輪委員)

- ・開館から5年間、コロナ禍等の難局を乗り越えながら短期間で幅広い活動を展開している点は極めて高く評価できる。
- ・実績向上に伴い職員の負担が増加しており、職員増員の検討が必要である。他都道府県と同規模博物館と比較しても職員数が少ない状況にある。学芸員を含めた適切な職員体制がなければ、組織の疲弊は避けられない。この5年間の拡大した活動実績を根拠として、人事当局に対し職員増員の交渉を進めていただきたい。
- ・ボランティア活動をより前面に出す運営方法を検討すべきである。地味な裏方というイメージではなく、記念館運営への参画も含めた積極的な位置づけが望ましい。全国の博物館共通の課題ではあるが、地域全体でボランティア参加を促し、職員と同等に重要な役割を担える仕組みの構築が求められる。特に関ヶ原は周辺に広範な史跡があるため、ボランティアの活動領域は多岐にわたる。他施設の事例も参考にしながら、関ヶ原独自のボランティア活用モデルの確立を期待する。
- ・若手研究者育成支援の体制をここ2～3年で確立した点は特筆に値する。この取り組みを継続しつつ関ヶ原ならではの研究テーマを深化させ、将来的には「関ヶ原賞」のような顕彰制度の創設も検討に値する。若手研究者による地道な調査研究は学術的基盤となるものであり、その成果を記念館が活用し、一般市民にも分かりやすく伝える展示方法の工夫がさらに望まれる。
- ・出版活動、展示物制作、資料輸送など様々な活動には資金が必要である。ぜひ各種ファン드를積極的に活用していただきたい。現在、国は文化財の利活用を法律に明記するほど観光立国政策を推進している。その流れの中で、文化庁や国土交通省だけでなく、林野庁な

ども多くの助成制度を設けている。また、民間の助成金も充実している。これらのファン
ドを活用するための運営実績もこの5年間で着実に積み上げてきた。この実績を基に、ぜ
ひ積極的に外部資金の獲得に取り組んでいただきたいと思います。

- ・歴史資料の購入や借用により展示物を充実させてきたが、今後は寄託品の増加にも注力し
ていただきたいと思います。適切な湿度・温度管理が徹底された収蔵庫の整備と確立された管
理体制により、博物館としての信用も高まってきた。この信用をもとに、関ヶ原に関連す
る寺社からの資料寄託を積極的に働きかけていただきたい。寄託品を増やすことで、さら
なる収蔵品の充実を図っていただければと思う。
- ・記念館に対する町民や関係者からの評価を受ける仕組みの構築を提案したい。記念館の持
続的な発展のためには、定期的な評価を受け、その結果を改善に活かすサイクルが必要。
地域に根ざした施設として、町民からの意見や評価を積極的に取り入れ、地域のニーズを
的確に把握することが重要である。
- ・海外の博物館や資料館、例えばワーテルロー博物館などと職員の交換留学を検討してはど
うか。双方が宿泊施設を提供する程度の支援で、実務的な交流を実現できる。これにより
国際的なネットワークを構築することができる。同様の取り組みをしている国内施設は少
ないため、先駆的な国際交流モデルとして注目を集める可能性がある。

(梅本副館長)

- ・インバウンド対応については、資料1にあるように「多言語リーフレット配布枚数」で把
握している。入館案内の際に10カ国語のリーフレットから選んでお持ちいただいている
数字であるため、これが外国人入館者数に近い数値と考えている。10カ国語のうち、最
も多いのは英語、次いで中国語、韓国語が多い状況である。昨年度コロナ5類に移行して
からは、台湾からのバスツアー客に多く来館いただき、館内だけでなく雪も楽しんでいる
姿が見られた。最近では、欧米圏や中国圏からの少人数グループの個人客が多く来館いた
だいている傾向を実感している。こうしたトレンドを受けて、記念館としては、展示解説
に英語表記を増やしたり、5階にある館長の音声による史跡解説コンテンツに英語音声
を追加するよう準備を進めている。今後は、先生方からいただいたご意見を参考にしながら、
観光連盟やDMOなど各種団体と連携を図り、インバウンド対応の充実に取り組んでいき
たい。
- ・ワーテルローなど海外古戦場とは、来年度に連携協定から10年目を迎えるため、何らか
の交流事業や連携強化を検討していきたい。
- ・ボランティアの活用については、教育旅行で関ヶ原を訪れた子ども達に対し、館内では記
念館サポーターに、史跡巡りでは史跡ガイドの方に解説をしていただいている。また、関
ヶ原もりあげ隊や古戦場おもてなし武将隊関ヶ原組など、様々な形で関わる方々と連携し、
関ヶ原の魅力発信に取り組んでおり、当館もその一翼を担いながら連携を深めていきたい。
- ・職員の増員については、要望しているが、現状では実現が難しい状況。当館学芸員は企画
展の展示準備や寄託品などの資料調査に忙殺されているため、学芸員体制の充実について
は引き続き要望していく。

- ・関ヶ原での今後のイベント展開について、記念館の企画は来年度も今年度と同様に進めていく予定である。
- ・ファンドの活用については、新知事が就任会見で国の補助金など活用可能な資金確保を明言されており、観光部局としてもこうした資金調達に積極的に取り組んでまいりたい。

(小和田館長)

- ・若手研究者支援事業については、以前から構想していた取り組みが昨年度ついに立ち上がり、今年度は研究成果発表会の開催と論文集の発行という成果を上げることができた。記念館として今後も継続的に若手研究者の支援に力を入れていきたい。
- ・「SHOGUN 将軍」とのコラボレーション企画については、何らかの形で実現できるよう進めていきたい。
- ・館長として最も喜ばしいのは、新たな古文書などの収蔵品が年々充実している点である。記念館創設時の願いとして、いずれ国宝や重要文化財を展示できる施設になりたいと考えていたが、この夢が実現し、今年度の秋季特別展「関ヶ原～よみがえる天下分け目の戦い～」では、重要文化財を複数点展示することができた。3月から始まる春季特集展示では新収蔵品となる「大谷吉継黒印状」を公開予定であるが、歴史的に極めて重要な文書であり、大きな注目を集めるものと期待している。
- ・今年度は講演会を計13回、月に1回以上の頻度で開催した。この規模での継続的な開催は多大な準備と運営を要するもので、職員一同が一丸となって取り組んできた。本日、委員の皆様からいただいた貴重なご意見を参考にしながら、今後も記念館の活動をさらに充実させてまいりたいと考えている。